

## 364 大腸癌における組織学的多様性および腫瘍簇出 (budding) の臨床的意義に関する研究

弘前大学第2外科

平間公昭, 森田隆幸, 伊藤 卓, 今 充

〔緒言〕大腸癌の組織学的多様性(同一腫瘍内に複数の組織型が混在する所見)と腫瘍簇出(budding: 先進部において低分化ないし未分化細胞が周囲組織間隙に散布する所見)に着目して, それらの臨床的意義を検討し, urokinase-type plasminogen activator (uPA) との関連性を調査した。〔対象・方法〕75歳以下, mp以深, 根治度A, Bの大腸癌を対象として, 臨床病理学的諸因子との関係, 無再発5年生存率, 再発形式に与える影響について検討を加え, 当科手術症例ではuPAの免疫染色を施行した。〔結果〕組織学的多様性および簇出は, リンパ節転移や脈管侵襲と強く関連した。組織学的多様性および簇出陽性例は無再発5年生存率が不良であった。組織学的多様性陽性例は, 結腸癌は局所再発, 直腸癌は血行性転移, 簇出陽性例は, 結腸癌, 直腸癌とも血行性転移と関連が深かった。uPAは簇出陽性例に高率に発現し, 腫瘍深層部での発現が高度であった。〔考察〕大腸癌において, 組織学的多様性および簇出は, 生物学的悪性度を反映し予後を規定する重要な因子と思われた。

## 365 大腸癌症例におけるc-erb B-2遺伝子ならびにDNA ploidy patternの検討

総合木沢記念病院 外科

○田辺 博, 飯田 豊, 伊藤英夫, 渡辺 進

〔はじめに〕今回我々は、その予後を予測するうえでc-erbB-2遺伝子とDNA ploidy patternが指標になり得るかを検討した。〔対象〕1994年4月から1995年12月までに手術を施行した大腸癌症例28例を対象とした。28例について病理組織学的検討からDukes分類を行い、DukesA 8例(A群)、DukesB 7例(B群)、DukesC 7例(C群)、DukesD 6例(D群)とした。〔検査項目〕28例について術後の摘出標本からDNAを抽出し5 $\mu$ gを希釈しDot Blot法にて固定を行い<sup>32</sup>Pをラベルしたc-erb B-2遺伝子をHydrideし黒化度を測定し遺伝子増幅を判定し、基準値の2~4倍を(+), 4倍以上を(++)とした。またDNA ploidy patternについては摘出標本のDNAを裸刻化し核DNAを染色しFACSScanを用いDNAヒストグラムを作成し、DNA index(DI)を計算しDNA ploidy patternを検討した。これらの遺伝子学的項目について4群間を比較検討した。〔結果〕DNA aneuploidyの発現は28例中12例であり、これは進行度により発現が高い傾向にあった。またc-erbB-2遺伝子の検討ではA, C群に1例ずつ(+), D群に1例の(+)と1例の(++)増幅症例が認められた。

## 366 直腸癌における腫瘍マーカーとしての血清eNCAM(胎児性神経接着分子)測定の臨床的有用性

東京女子医科大学第二外科

永田 仁, 斎藤 登, 板橋道朗, 進藤廣成,

亀岡信悟, 浜野恭一

慶應義塾大学産婦人科 高松 潔

Behringwerke AG. Research Laboratory

Bernhard Auerbach, Nobert Madry

【目的】直腸癌患者における血清eNCAMとCEA値を測定し, 血清eNCAM値測定の有用性について検討を加えた。【対象】直腸癌症例45例。【方法】直腸癌症例45例に対し, 治療前血清eNCAM値, CEA値を測定し, 比較検討を行なった。なお, 非悪性腫瘍例30例をコントロール群とした。【結果】1.直腸癌群はコントロール群に比し血清eNCAM値は有意に高かった( $p=0.012$ )。2.血清eNCAM値はリンパ管侵襲陽性例で有意に高かった( $p=0.023$ )。3.血清eNCAM陽性例は26.7%, 血清CEA陽性例は24.4%であり, どちらかが陽性は48.9%であった。両者の相関係数は0.028であった。4.血清eNCAM値, CEA値ともに術後再発の有無, 再発形式による差を認めなかった。【結語】血清eNCAMはCEAとの組み合わせにより, 直腸癌スクリーニングに際し, 腫瘍マーカーとして有用であると思われた。

## 367 大腸癌におけるE-カドヘリン発現と予後

三重大学第二外科

毛利靖彦, 松本好市, 鈴木宏志

〔目的〕大腸癌組織における細胞間接着因子E-カドヘリンの発現を免疫組織学的染色にて行い, 予後および, 種々の病理学的事項との関係について検討した。

〔方法〕大腸癌組織100例のパラフィン包埋標本を対象とした。E-カドヘリンモノクローナル抗体を用いてABC法にて免疫組織学的染色を行った。E-カドヘリン染色度の評価は, 腫瘍組織で90%以上正常組織と同等の発現を認めるものをpreserved type, 10~90%をheterogenous type, 10%未満をloss typeとした。

〔結果〕preserved typeは43例, heterogenous typeは32例, loss typeは25例であった。臨床病期, 深達度, 分化度, リンパ節転移, 肝転移, 脈管侵襲とE-カドヘリン発現との間に有意な相関を認めた。E-カドヘリン減弱例(heterogenous typeあるいはloss type)で有意に予後が不良であり, さらに根治手術後再発例が有意に多かった。多変量解析の結果, E-カドヘリンは独立した予後因子であると考えられた。

〔まとめ〕大腸癌組織におけるE-カドヘリンの発現は分子生物学的悪性度の一指標となり, 術後の補助療法の計画に有用であると考えられた。